

使徒の働き9章「異邦人宣教への備え」

1A サウロの回心 1-31

1B 天からの光 1-19a

1C 迫害されているイエス 1-9

2C 主の弟子によるバプテスマ 10-19a

2B 御名を伝える選びの器 19b-30

1C 福音の論証 19b-22

2C エルサレム訪問 23-30

3B 福音宣教の広域化 31

2A ペテロへの備え 32-43

1B 主に倣う奇跡 32-42

1C 中風の立ち上がり 32-35

2C 死人の起き上がり 36-42

2B 壁が崩される前置き 43

本文

使徒の働き9章に入ります。私たちは、ステパノの殉教によってエルサレムにいる人々が、使徒たち以外は散らされていったところを見ました。けれども、その散らされて行ったところで、彼らが主のことばを伝えていき、神はむしろ、イエス様が約束された、エルサレムからユダヤとサマリアの全域に、ご自身の証しをしていくということが実現していきます。そこで一つの壁が崩されました。ピリピがサマリア人に伝道していったのです。彼らが受け入れていって、ユダヤ人とサマリア人の間にある確執が、福音宣教の中で取れていきました。

福音が広がっていきます。けれども、懸念材料がありました。大きな懸念材料です。それは、迫害の手を止めず、エルサレムを越えてキリスト者を取り締まろうとしていた者がいたことです。それが、ステパノの石打ちに賛同していた、最高法院、サンヘドリンの一員でもあるサウルの行動です。9章はそこから始まります。

1A サウロの回心 1-31

1B 天からの光 1-19a

1C 迫害されているイエス 1-9

¹さて、サウロはなおも主の弟子たちを脅かして殺害しようと息巻き、大祭司のところに行って、²ダマスコの諸会堂宛ての手紙を求めた。それは、この道の者であれば男でも女でも見つけ出し、縛り上げてエルサレムに引いて来るためであった。

8章の始まりで、サウルがエルサレムで、「8:3 家から家に押し入って、教会を荒らし、男も女も引きずり出して、牢に入れた。」とあります。しかし、彼はそれでも怒りは収まりませんでした。主の弟子たちを脅迫し、脅迫するだけでなく殺害しようと考えています。「息巻き」とありますが、ほとんど過呼吸になるほどだったのです。彼の頭の中では、聖書の中にある、主に対する熱情を考えていたことでしょう。偶像礼拝者に対して、主は、例えばモアブの女たちの誘惑で偶像を拜んで行ったイスラエル人を、ピネハスが剣でもって殺しました。(民数 25:1-5)。そして預言者エリヤは、バアルの預言者と対峙して、450 人を殺すように命じました(I 列王 18:40)。同じような思いだったのでしょう。しかし、彼自身が後に語っているように、「神に対して熱心であることを証しますが、その熱心は知識に基づくものではありません。(ローマ 10:2)」ということです。

サウロは、シリアにあるダマスコの諸会堂にも行って、そこでキリスト者を捕縛してエルサレムに引いてくる許可を、大祭司から求めました。ユダヤ人は、2 章で聖霊が下った時に見たように、ローマ社会の至るところに住んでいて、世界最古の町とも呼ばれるダマスコに、大きなユダヤ人共同体がありました。そこに、この道の者たちがやってきて、異端の教えでそそのかしたら、大変なことになるという切実な思いで、出かけて行ったのだと思います。まさに、伝染病の感染拡大を防ぐために立ち上がった、みたいな勢いです。

ところで、この時点で「キリスト者」という言葉は使われていません。「この道」と呼ばれていました。聖書には、「正しい者の道」(詩篇 1:6)とか、「主の道」(イザヤ 40:3)という呼び名がありますが、彼らのことを「この道」と呼んでいました。キリスト者は、アンティオキアの教会で、信者ではなく、周囲の人々がそのように呼ぶようになってから使われてきた言葉です。「この道」はふさわしいですね、主は、「わたしが道であり、真理であり、命です。」と言われましたから。日本人ならば、「キリスト教」ではなく、「キリスト道」と呼んだほうが、心にすっと来るかもしれません。難しい神学的、教義的な教えではなく、この方について行き、この方に倣う道です。

³ ところが、サウロが道を進んでダマスコの近くまで来たとき、突然、天からの光が彼の周りを照らした。⁴ 彼は地に倒れて、自分に語りかける声を聞いた。「サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか。」

エルサレムからダマスコまでは、約 240 キロメートルあります。エルサレムの旧市街の城壁で、北側に最も利用されているダマスカス門というのがあります。それはエルサレムからダマスコに行く時に使う門であり、サウロもそこから出て行ったのではないかと考えられます。ダマスコに近づいた時に、午前礼拝でお話した、「天からの光」がサウロを照らしたのです。後に、別名がパウロですが、パウロが、「26:13 真昼に私は天からの光を見ました。それは太陽よりも明るく輝いて、私と私に同行していた者たちの周りを照らしました。」とあるのです。

つまり、これは天にある神の栄光の輝きそのものでした。主イエスがベツレヘムで誕生された時に、夜なのにその周りが明るくなりましたね。その光です。創世記において、また黙示録において、どちらも、太陽や月の光がないのに、それで光があります。創世記には、第一日目に「光よ、あれ」と主が言われて、けれども第四日目に、太陽や月、星を造られています。その光は太陽の光ではなく、主なる神ご自身の光です。それから、黙示録の天のエルサレム、神の都においても、「21:23 都は、これを照らす太陽も月も必要としない。神の栄光が都を照らし、子羊が都の明かりだからである。」とあります。私たちは、何らかの形で天からの光に触れて、それで回心します。単に、信条に同意した、あるいはイエス様の話に感動した、そんなんでは永続的な回心はできません。試練が来たらいても簡単に信仰を捨ててしまうし、世の楽しみがありますから、信仰生活を送ることはできません。天からの召しがあってこそ、回心です。

そして、午前礼拝でお話したように、サウロが迫害していたのは主の弟子たちでしたが、イエス様は、「わたしを迫害している」と言われます。サウロにとって、これは間違いなく神の栄光であり、輝きであり、神からのものであると分かったのですが、その当事者を迫害していると、この方は言われるのです。

⁵ 彼が「主よ、あなたはどなたですか」と言うと、答えがあった。「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。

サウロは、その場で回心しています。「主よ」と呼んでいます。この方が主でなくて、誰なのか？と知ったのですが、誰だけが分かりませんでした。しかも、迫害しているとは。「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。」とイエス様は言われました。パウロは、三日目に甦られたイエス様には出会いませんでしたが、主は最後に、パウロのような迫害者に復活の姿をもって現れてくださったのです。

イエス様は、「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。」とされています。これは驚くべきことです。迫害しているのに、その張本人に親しく語りかけておられます。まさに、それは主が十字架にかけられた時に、罵っている者たちに対して、彼らの罪をお赦しくださいと祈られたその姿勢と同じです。そして、その姿をサウロはステパノに見ていたのです。「7:60 主よ、この罪を彼らに負わせないでください。」この証しの種がパウロに飢えられたのでした。私たちは、いかに証しを他の人々に立てることができるのか？と思います。けれども、誠実に主を見上げて、この方に倣う時に、自分でも気づかぬうちに、神は証しの力を、私たちを通して広げてくださいます。

パウロは、この時にイエス様が次のようにも語ったことを、ヘロデ・アグリッパ二世の前で証言しています。「26:14 とげの付いた棒を蹴るのは、あなたには痛い。」パウロは、激しく、弟子たちを迫害していましたが、それは彼がうすうす、この方に真理があるのではないかと思っていた裏返しで

した。ここの、とげの付いた棒というのは、牛で畑を耕す時に、頸木を付けるのですが、それをいやがって、牛が足を蹴ることがあります。けれども、その蹴る先に棒を付けておいて、蹴ったらその棒の先に刺さるようにするのです。それで蹴るのをやめさせるのですが、すなわち、蹴れば蹴るほど、自分自身を痛めるのです。

サウロは、幼い時からユダヤ人として育てられました。「ピリ 3:5 私は生まれて八日目に割礼を受け、イスラエル民族、ベニヤミン部族の出身、ヘブル人の中のヘブル人、律法についてはパリサイ人、」ベニヤミン族出身ですが、そこから初代王サウルが出てきましたね。そこから、サウロという名が使われています。彼は、ローマのキリキア属州で生まれ育ちましたが、エルサレムでガマリエルの下で教育を受けました。律法に精通していたからこそ、この道が外れていると思っていた時は、あってはならないと思い、激しく迫害したのです。しかし、イエスが神の栄光の輝きをもって現れてくださったので、律法と預言がすべてこの方にあると成就したこと、この方が約束のメシアであり、神の御子であることが、すべてつながったのです。中途半端な律法の知識であれば達成できなかったことを、パウロは、徹底的に学び、また実践していたので、キリストこそが律法の目標であり、この方にあると聖書が実現したことを知ったのです。パズルの最後の一片がはめられた、ということです。

⁶ 立ち上がって、町に入りなさい。そうすれば、あなたがしなければならぬことが告げられる。」

主はご自分の計画を進めておられます。けれども、初めから明らかにしておられません。パウロがご自分の指示に従うことによって、次にしなければいけないことを示されます。主は、このようにして私たちを、一步一步導かれます。ですから、信仰による従順が必要なのです。

⁷ 同行していた人たちは、声は聞こえてもだれも見えないので、ものも言えずに立っていた。

声が聞こえていましたが、音として聞こえていただけで、言葉としては判別できなかったのでしょう。主が選び、また信仰をもって応答したからこそ、聞こえるものが聞こえました。

⁸ サウロは地面から立ち上がった。しかし、目を開けていたものの、何も見えなかった。それで人々は彼の手を引いて、ダマスコに連れて行った。⁹ 彼は三日間、目が見えず、食べることも飲むこともしなかった。

これはまさに、彼にとっての死の三日間であったと言えます。目の見えない間、ちょうどイエス様が十字架の死によって、三日間、墓に葬られていたように、パウロは、これまでの生き方や在り方に対して死を迎えなければいけないことを知る時だったのではないかとと思います。

先ほど、ピリピ人への手紙を引用して、パウロがいかにユダヤ教において抜きんでいたかを話しましたが、その続きがこうなっています。「3:7-8a しかし私は、自分にとって得であったこのよう
なすべてのものを、キリストのゆえに損と思うようになりました。それどころか、私の主であるキリス
ト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、私はすべてを損と思っています。私はキリストの
ゆえにすべてを失いましたが、それらはちりあくただと考えています。」ここの「塵芥」σκύβαλον と
いう言葉ですが、「糞」とも訳すことのできる言葉です。キリストを知っていることのすばらしさのゆ
えに、これまでの優れていたものが全て糞みたいなものだ、ということです。このような、はっきりと
した回心があってこそ、キリスト者が自分の古い人に死に、キリストにあって新しくされているとい
うことを知ることができます。そうでないと、これまでの業績をキリストによってさらに築き上げよう
としてしまいます。それがユダヤ主義であり、イエスの福音だけでは足りず、救われるためにユダ
ヤ人の律法を守らないといけないと教えたのです。

2C 主の弟子によるバプテスマ 10-19a

¹⁰ さて、ダマスコにアナニアという名の弟子がいた。主が幻の中で「アナニアよ」と言われたので、
彼は「主よ、ここにおります」と答えた。

主はこれから、サウルが聖霊に満たされ、また水のバプテスマを受けるように導かれます。その
時に、主はダマスコで、既に信じて、弟子となっているアナニアを用いられます。サウロは、後に異
邦人の使徒となる、いわば大きな器であります。彼にバプテスマを授けるのに、名もない普通の
弟子をお用いになったということが大事です。再び、父なる神の約束、「2:17 すべての人にわたし
の霊を注ぐ。」ということなのです。特別に聖職者のみが、バプテスマを授けられるということでは
ないのです。

そして御霊が注がれると、「青年は幻を見る」とあります。アナニアは、今、幻を見ています。主
が幻の中で現れておられます。幻は、夢のようなのですが、意識がない時、眠っている時ではなく、
起きている時に見るものです。私たちがこの前、宣教師の会議に行った時に、「聖霊の賜物によっ
て祈る」祈り会がありました。幻や預言の賜物が与えられている兄弟姉妹が、宣教師のために祈
るのです。男女二人の方が私たち夫婦のために祈られましたが、どちらも同じ幻を見ていました。
そうやって、それが主からのものかどうか確認していました。聖書の中に、ヨセフのように創世記
からずっと、幻によって主がご自分を示されることが数多くありますが、それ自体は珍しいことでは
ありません。主の弟子が、幻を見て、それに基づいて大事な決断をすること、ここが使徒の働きに
おいて、主が実行しておられる新たな神のご計画です。

ここで大事なものは、アナニアのしもべの態度です。「アナニアよ」と呼ばれたら、「主よ、ここに
おります」と答えています。イサクを献げなさいと命じられた時、アブラハムは、「はい、ここに
おります」と答えています(創世 22:1)。まだ幼かったサムエルも、「はい、ここに
おります。」と答えています

す(Ⅰサム 3:4)。イザヤが主に遣わされる時も、「ここに私がおります。」と答えています(6:8)。主なのですから、貴方が言われることは何でも致します、という態度です。

¹¹ すると、主はこう言われた。「立って、『まっすぐ』と呼ばれる通りに行き、ユダの家にいるサウロという名のタルソ人を訪ねなさい。彼はそこで祈っています。¹² 彼は幻の中で、アナニアという名の人が入って来て、自分の上に手を置き、再び見えるようにしてくれるのを見たのです。」

とても具体的な指示ですね。「『まっすぐ』と呼ばれる通り」ですが、今のダマスカスにもあります。東西に平行に走っている二つの主要街路のうちの一つです。そしてユダの家にサウロがいるとのことですが、初めからそこに滞在する予定だったのかもしれませんが。彼が、キリキア州のタルソ出身であることも教えておられます。ちなみに、私たち夫婦は 2019 年の春にタルソを訪れました。ローマの古代都市の遺跡が一部残っています。

そして大事なのは、サウロもまた、アナニアという名の人が入ってくる、しかも自分に手を置いて祈り、再び見えるようになるまで幻で語られていたことです。8 章では、サマリア人に対して、エルサレムからペテロとヨハネが遣わされて、手を置いて祈りました。ここでは、アナニアという弟子がそれを行います。大事なのは、アナニアにも語られ、サウロにも語られていました。10 章においても、ペテロにも語られ、また百人隊長コルネリウスにも語られました。双方に主が語られています。時々、「私は主に語られました。あなたは、これこれをすべきです。」と預言のようにして指示してくる人がいますが、主が語られる時は、一人だけでなく、二人、また三人の証人を置かれます。ですから、双方がそういう思いが与えられている時に、主によるものと確認できるのです。

¹³ しかし、アナニアは答えた。「主よ。私は多くの人たちから、この人がエルサレムで、あなたの聖徒たちにどんなにひどいことをしたかを聞きました。¹⁴ 彼はここでも、あなたの名を呼ぶ者たちをみな捕縛する権限を、祭司長たちから与えられています。」

主よ、とは呼んでいるものの、この指示に対してついて行けない、理解ができないという気持ちはよく分かります。エルサレムにおける迫害の急先鋒がサウロであり、それをダマスコにまで及ぼそうとしてやって来ていた、その情報までアナニアは聞きつけていたからです。

ところでアナニアは、主の弟子たちを、「あなたの聖徒たち」と呼んでいますね。これは、聖なる神に選ばれて、神のものにされている人々という意味合いがあります。アナニアは、触れてはいけない人々に触れている、ちょうどイスラエルの民に触れたら、わたしの瞳に触れているのだということ。主は言われていますが、それをサウロが行っているではないでしょうか？と訴えているのです。私たち信者は、みながキリストの血によって神のために聖別された者たち、聖徒であります。

¹⁵ しかし、主はアナニアに言われた。「行きなさい。あの人はわたしの名を、異邦人、王たち、イスラエルの子らの前に運ぶ、わたしの選びの器です。¹⁶ 彼がわたしの名のためにどんなに苦しまなければならないかを、わたしは彼に示します。」

主は、アナニアの訴えにも関わらず、「行きなさい。」と命じられます。それには、彼にイエスご自身が使命を帯びさせているからです。ご自身の名を、三種類の人々に運んでいく人だということです。一つは、「異邦人」です。主が、わたしの証人となると言われてから、弟子たちは、あくまでもユダヤ人たちにのみ語っていました。けれども、地の果てにまで証人となると言われておられ、また大宣教命令では、「あらゆる国の人々を弟子としなさい。(マタイ 28:19)」とされていました。それで、彼らはユダヤ人が神の国に入るという考えの中にいました。ユダヤ教の教えがそれだったからです。イエスご自身も初めは、異邦人ではなく、サマリア人ではなく、失われたイスラエルの羊を捜していることを語っておられました。けれども、それでも異邦人に、サマリア人に福音を伝える可能性を持たせておられましたが、それを明確に昇天前に語っておられたのです。

その壁が少し壊れたのが、前回のサマリア人宣教です。しかし、サマリア人として、ユダヤ人の仲間という意識が強かったと思います。異邦人は蚊帳の外です。しかし、主は、異邦人に福音を運ぶ器として、パウロを選ばれました。パウロは何度となく、手紙の中でこの召命について話しています。「ガラ 1:15-16a しかし、母の胎にあるときから私を選び出し、恵みをもって召してくださった神が、異邦人の間に御子の福音を伝えるため、御子を私のうちに啓示することを良しとされた…」興味深いことに、パウロは宣教において、伝道の拠点をユダヤ教の会堂、シナゴグにしていました。ユダヤ人たちが集まります。ところが、その福音を聞いて信じていく者の多くが、異邦人の改宗者だったり、神を敬う者たちであったりします。ユダヤ人が妬みを抱くのですが、そうしながら、異邦人がかえって救われていくという形で福音が前進しました。

そして、「王たち」と言われています。パウロは、エルサレムで騒動が起こってから、ローマの千人隊長に保護され、そのまま総督の住むカイサリアに移されました。そこで総督たちのまえで弁明し、またヘロデ・アグリッパ二世の前で証しをしました。それから最後に、ローマでカイサルの前で証言をしました。このようにして王たちにも主の御名を携えていったのです。

そして、「イスラエルの子ら」と言っています。彼は異邦人への使徒と自分でも呼んでいますが、同胞の民をないがしろにしていたのではありません。むしろ、愛に満たされていました。ローマ9章では、同胞のことで心が痛み、「のろわれた者となってよいとさえ思っています。」とまで言っています(3節)。彼は伝道する所はシナゴグであり、同胞の民に語っていました。そして、三回の宣教旅行を終えた後、エルサレムへの旅をし、そこでヘブル語で証しをしたのです。こうやって、主は予め、パウロがご自分の名を携える器となることを知っておられて、選んでおられたのです。

主は、アナニアにさらに励ますために、彼が苦しむことも予め示すと伝えておられます。苦しまなければならないのに、なおのこと選ばれて、その召命に忠実に従うのだということを伝えられて、アナニアが、サウロは敵でも危険でもなく、これから神の選びの器として用いられるのだと納得することになります。これから読んでいきますが、サウロは初めからユダヤ人に殺意を抱かれ、逃亡するところから始まります。宣教旅行は、逃亡劇とセットで前進していきます。そして、一度ぜひ、コリント第二 11 章 23 節から 27 節まで読んでみてください。どれだけの苦しみを経たのか、想像できないほどの過酷さです。それであっても、キリストを知ったことのすばらしさのゆえに、これまでの人生の業績が塵芥であったということなのです。

17 そこでアナニアは出かけて行って、その家に入り、サウロの上に手を置いて言った。「兄弟サウロ。あなたが来る途中であなたに現れた主イエスが、私を遣わされました。あなたが再び見えるようになり、聖霊に満たされるためです。」

アナニアは、疑念を抱いていたことでしょう、けれども従いました。これが大事ですね、理解できなくとも、主が言われたという理由だけで従うのです。そして、そのまま従って彼に手を置きます。「兄弟サウロ。」と呼びかけています。すでに敵ではなく、兄弟なのです。

それから、「聖霊に満たされる」という約束を伝えています。聖霊が初めに下られた時から、ペテロや他の使徒たちは、この約束を信じていました。悔い改めたら、罪が赦されて、聖霊の賜物が与えられるというものです。サマリア人たちも、水のバプテスマの後に、手を置かれて聖霊を受けました。ここでも、サウロ自身が聖霊に満たされて、水のバプテスマを受けています。ここで、上下の差はありません。互いに仕えるのです。聖霊は全ての人に与えられ、その賜物は全ての人が用いるのです。

18 するとただちに、サウロの目から鱗のような物が落ちて、目が見えるようになった。そこで、彼は立ち上がってバプテスマを受け、^{19a} 食事をして元気になった。

「目から鱗」という日本語のことわざがありますが、聖書から来ています。サウロは、目が見えるようになりましたが、それは物理的な目のみならず、霊的な意味も含まれます。心の目が開かれて、彼は新しい人になりました。バプテスマによって、そのことを表明しました。キリストと共に古い人に死んでいること。そしてキリストと共によみがえり、新しい命にあずかっていること。それから、三日ずっと食事をしていなかったの、元気づくために食事をしています。肉体への世話も、私たちには必要です。聖書にも食事をして元気ついたという言葉が多くの場面で見られます。

2B 御名を伝える選びの器 19b-30

1C 福音の論証 19b-22

^{19b} サウロは数日の間、ダマスコの弟子たちとともにいて、²⁰ ただちに諸会堂で、「この方こそ神の子です」とイエスのことを宣べ伝え始めた。

アナニアを始め、サウロはダマスコにいる弟子たちと交わっていました。それから直ちに福音を語り始めます。サウロあるいはパウロにとって、イエスこそがメシアであり、神の御子であるということは、先にお話したように、パズルの最後の一片が埋められたようなものであり、これまで得た全ての聖書知識がフル活用されたのだと思います。主は何度となく、ご自分が律法と預言者の成就であることを語られました。「マタ 5:17 わたしが律法や預言者を廃棄するために来た、と思っはなりません。廃棄するためではなく成就するために来たのです。」

イエスが神の子であるというのは、ご自身が大祭司カヤパの前で告白されたとおりであり、それによって死刑宣告が下されました。預言には、何度となく、キリストが神の子であるということ、つまり神ご自身であることを教えています。「詩篇 2:7 主は私に言われた。『あなたはわたしの子。わたしが今日、あなたを生んだ。』」「イザ 9:6 ひとりのみどりごが私たちのために生まれる。ひとりの男の子が私たちに与えられる。主権はその肩にあり、その名は「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」と呼ばれる。」

²¹ これを聞いた人々はみな驚いて言った。「この人はエルサレムで、この名を呼ぶ人たちを滅ぼした者ではないか。ここへやって来たのも、彼らを縛って、祭司長たちのところへ引いて行くためではなかったか。」²² しかし、サウロはますます力を増し、イエスがキリストであることを証明して、ダマスコに住むユダヤ人たちをうろたえさせた。

会堂で聞いている人々は、当然ながら驚いています。全く正反対をサウロが今、しているからです。ここで興味深いのは、22 節ですが、そのような反応があるごとに、「ますます力を増し」ていることです。ステパノが、知恵をもって議論したのでユダヤ人たちが対抗することができませんでした。サウロも同じように、ますます力を増して、イエスが彼らのメシアであることを証明していったのです。聖霊に満たされているからです。そして、パウロに与えられている、イエス様について論じる力、賜物があるからでしょう。

けれども、ステパノの時と同じように、相手は反論ができなくなっているから、あとは力づくで抑えつけるしかなくなります。パウロには、殺そうと企てる者たちが出てきますが、それはもう反論できないので、自分たちは悔い改め、イエスを信じ受け入れて、この方を主とするしかないのです。その悔い改めを拒んでいるだけなのです。

2C エルサレム訪問 23-30

²³ かなりの日数がたち、ユダヤ人たちはサウロを殺す相談をしたが、²⁴ 彼らの陰謀はサウロの知るところとなった。彼らはサウロを殺そうと、昼も夜も町の門を見張っていた。

ここ、「かなりの日数がたち」とルカは記していますが、パウロ自身がガラテヤ人への手紙で自分の辿った経緯を、順序立てて話している部分があります。「1:15-17 しかし、母の胎にあるときから私を選び出し、恵みをもって召してくださった神が、異邦人の間に御子の福音を伝えるため、御子を私のうちに啓示することを良しとされたとき、私は血肉に相談することをせず、私より先に使徒となった人たちに会うためにエルサレムに上ることもせず、すぐにアラビアに出て行き、再びダマスコに戻りました。」彼は、そのままアラビアに出て行ったことが分かります。当時のアラビアは、今のアラビア半島だけでなく、ヨルダン南部も含み、特にナバテア王国というのが栄えていました。パウロが、コリント第二 11 章で、ダマスコで、アレタ王の代官がパウロを捕らえようと狙っていることを話しています。このアレタ王とは、ナバテア王国の最も栄えた王、アレタス四世です。彼の娘は、ヘロデ・アンティパスの妻であり、ヘロデはヘロデアと結婚するために彼女と別れました。

アラビアで何をしていたのでしょうか？アレタ王の代官に追われるぐらいですから、そこでも伝道していたのかもしれませんが、具体的には分かりませんが、パウロが本格的に福音宣教に関わるのは、あと十年ぐらいしてからです。アンティオキアに教会が建てられ、バルナバがパウロを呼ぶ時まで、ルカは彼が何をしていたのか多くを書き記していません。パウロは力強くイエス様がメシアであることを論証していましたが、神の時がありました。備えがありました。多くの神に用いられる人々は、用いられる前に長い期間の備えがあります。

²⁵ そこで、彼の弟子たちは夜の間には彼を連れ出し、籠に乗せて町の城壁伝いにつり降ろした。

アラビアから戻りダマスコに来るも、ユダヤ人たちはサウロを殺す陰謀を企てていました。それで、籠に載せて城壁伝いに釣り降ろしています。昔、イスラエルの間諜がエリコの町を偵察に来た時、かくまっていた遊女ラハブは、同じように城壁伝いに釣り降ろしました。当時、しばしば家屋が城壁の一部になっていることがありました。城壁がそれだけ厚みがあったのです。

²⁶ エルサレムに着いて、サウロは弟子たちの仲間に入ろうと試みたが、みな、彼が弟子であるとは信じず、彼を恐れていた。

アナニアもそうでしたが、エルサレムにいる弟子たちも恐れています。弟子であることを装って、内部に浸透し、それで一気に捕縛するという工作を行ってもおかしくありません。そこで登場するのが、バルナバです。ガラテヤ書では、パウロはペテロのところに 15 日間、滞在していたとありますが、彼をしても、弟子たちの疑心暗鬼を取り除くことができないでいたのです。

²⁷ しかし、バルナバはサウロを引き受けて、使徒たちのところに連れて行き、彼がダマスコへ行く途中で主を見た様子や、主が彼に語られたこと、また彼がダマスコでイエスの名によって大胆に語った様子を彼らに説明した。²⁸ サウロはエルサレムで使徒たちと自由に行き来し、主の御名によって大胆に語った。

バルナバの名前はヨセフですが、人々が「慰めの子」と彼を呼ぶようになり、それがバルナバです。彼は、人々に慰めを与える人でした。使徒の働きでは、サウロまたパウロが、エルサレムにいる弟子たちとの架け橋になり、後にアンティオキアにある教会では、その教会にサウロを招き入れた人でありました。パウロはあまりにも劇的な回心であり、異邦人への福音宣教という特別な使命を帯びていて、エルサレムにある教会では、まだ受け入れる許容力がなかったのです。しかし、キリストの体というのは、それぞれに異なる賜物があり、異なる働きや奉仕があります。ペテロにはできなかったことを、バルナバはできたのです。彼は、サウロの回心を順序立てて話しました。それで彼らが信用するようになりました。

²⁹ また、ギリシア語を使うユダヤ人たちと語ったり、論じたりしていたが、彼らはサウロを殺そうと狙っていた。³⁰ それを知った兄弟たちは、彼をカイサリアに連れて下り、タルソへ送り出した。

ステパノの時と同じですが、ギリシア語を使うユダヤ人、ヘレニズムのユダヤ人に福音を語り、論じていました。ダマスコでそうであったように、サウロを殺そうとする人々が起こったのです。それで兄弟たちが、彼を大きな港のあるカイサリアまで連れて行き、それでタルソ行きの船に乗せました。こうして彼は数年、故郷のタルソにいることになります。そこで何をしていたのか、ルカも、彼自身も記していません。けれども、それがかえって、神の備えを教えてください。主は、今、起こっていることを将来のご計画ための備えとしておられます。今はそれが何の準備のためなのか？分からないかもしれませんが、主が備えておられるのです。

3B 福音宣教の広域化 31

³¹ こうして、教会はユダヤ、ガリラヤ、サマリアの全地にわたり築き上げられて平安を得た。主を恐れ、聖霊に励まされて前進し続け、信者の数が増えていった。

ここで、さらなる教会の前進が書かれています。ステパノの殉教を契機に起こった教会への迫害ですが、その急先鋒のサウロを主が捕らえて下さり、彼自身もタルソに移ったため、教会全体に平安が築き上げられました。教会は、こういった平安の時、また迫害の時と、それぞれの時があります。ここに、ユダヤとサマリア以外に、ガリラヤにも教会が興されていることが書かれていますね。広がりを見せています。

平安な中で、主を恐れていきました。霊的復興には必ず、主への恐れが先立ちます。この方を

真剣に受け入れるのです。そして、次に聖霊による励ましです。私たちは絶えず励ましが必要ですが、それを行われるのが聖霊です。そして、信者の数が増えていきます。増えるのはあくまでも結実であり、それが目的ではありません。

2A ペテロへの備え 32-43

そのような中で、エルサレムの教会の指導者であるペテロが登場します。彼はもはや、エルサレムに留まることなく、巡回する使徒となっていきました。ガラテヤ人への手紙では、アンティオキアにペテロが来ていることが書かれています。ペテロの第一の手紙は、彼が今のトルコ、ガラテヤ地方などにいる信者たちを励ましている内容です。

1B 主に倣う奇跡 32-42

1C 中風の立ち上がり 32-35

³²さて、ペテロがあらゆるところを巡回していたときのことであった。彼は、リダに住む聖徒たちのところにも下って行った。

リダであります、ロッドとも呼ばれます。エルサレムからは北西 40 キロで、シャロン平原が地中海沿いにありますが、その南に位置します。異邦人が多く住んでいましたが、重要なユダヤ人の町です。ベングリオン空港は以前、ロッド空港と呼ばれていたように、空港がこの町に隣接して作られています。

³³そこで彼は、アイネアという名で、八年間床についている人に出会った。彼は中風であった。³⁴ペテロは彼に言った。「アイネア、イエス・キリストがあなたを癒やしてください。立ち上がりなさい。そして自分で床を整えなさい。」すると、彼はただちに立ち上がった。³⁵リダとシャロンに住む人々はみなアイネアを見て、主に立ち返った。

イエス様の福音宣教と働きととても似ていることが起こりました。中風の人の癒しです。四人の人が、中風の人の床を担いで、屋根に穴を開けて、そこからイエス様のところにつり降ろしましたね。アイネアを見て、イエス様が中風の者を癒やされたことを思ったことでしょうか、信仰の賜物を用いて、「イエス・キリストがあなたを癒やしてください。立ち上がりなさい。そして自分で床を整えなさい。」と言います。立ち上がるだけでなく、自分の横たわっていた床を整えるのです。このことによって、今や私は立ちあがった、床の生活はもう終わったことを意思表示しています。新しく造られた者としての生活です。

そしてこのことを通して、リダだけでなく、シェロン平原にいる人々も、主に立ち返りました。

2C 死人の起き上がり 36-42

³⁶ またヤッファに、その名をタビタ、ギリシア語に訳せばドルカスという女の弟子がいた。彼女は多くの良いわざと施しをしていた。

ヤッファは、旧約時代は地中海の主な港として使われていたところで、ソロモンの神殿の、レバノンから運ばれてきた杉材はここに陸揚げされてエルサレムに運ばれました。リダから約 18 ㎞北西にある町で、今はテル・アビブに隣接しています。

そしてそこに、タビタという人がいました。他の人々と同じように、彼女はヘブル語の名前だけでなく、ドルカスというギリシア語の名前もありました。ペテロもそうですね、ペテロはギリシア語ですが、ヘブル語はケファという名前です。ドルカスは、カモシカという意味です。ヤッファも、リダと同じように異邦人の多い地域です。

そして、彼女は「多くの良いわざと施しをしていた。」とあります。ローマ 12 章に、賜物の列挙の中に「慈善を行う人(12:8)」があります。人々にいろいろな良いわざをするのに賜物がありました。

³⁷ ところが、そのころ彼女は病気になって死んだ。人々は遺体を洗って、屋上の部屋に安置した。
³⁸ リダはヤッファに近かったので、ペテロがそこにいと聞いた弟子たちは、人を二人、彼のところに遣わして、「私たちのところまで、すぐ来てください」と頼んだ。

このことは、エリシャのことを思い出しますし、また主ご自身のことを思い出します。エリシャは、シュネムの女がいて、彼女の子が死んでしまい、その子をエリシャの部屋のところに寝かせて、急いでカルメル山にいたエリシャの所に行きました。イエス様の場合は、ヤイロです。会堂司でしたが、娘が重い病気にかかり癒してほしいとお願いしました。ところが途中で死んでしまいました。

³⁹ そこで、ペテロは立って二人と一緒に出かけた。ペテロが到着すると、彼らはペテロを屋上の部屋に案内した。やもめたちはみな彼のところに来て、泣きながら、ドルカスが一緒にいたころ作ってくれた下着や上着の数々を見せるのであった。

もうすでに人々は、ドルカスが死んでしまったことを悼み悲しんでいる状態にあります。しかし、ペテロは主のことを思い出します。

⁴⁰ ペテロは皆を外に出し、ひざまずいて祈った。そして、遺体の方を向いて、「タビタ、起きなさい」と言った。すると彼女は目を開け、ペテロを見て起き上がった。⁴¹ そこで、ペテロは手を貸して彼女を立たせた。そして聖徒たちとやもめたちを呼んで、生きている彼女を見せた。

イエス様もヤイロの娘を立ち上がらせるときに、家族とペテロ、ヨハネ、ヤコブの弟子以外を外に出しました。そして、「タリタ、クミ」(少女よ、起きなさい)と言われました。ペテロは今、「タビタ、クミ」と言われています。とても音が似ていますね。ペテロは主ご自身をまねていたのです。これは、弟子として模範的です。主がなされたことを思い出し、そのまま行うのです。

⁴²このことがヤッファ中に知れ渡り、多くの人々が主を信じた。

ヤッファにおいても、主を信じる人々が多く起こされました。

2B 壁が崩される前置き 43

そして大きな前触れのような最後の一節があります。

⁴³ペテロはかなりの期間、ヤッファで、シモンという皮なめし職人のところに滞在した。

ペテロは、サマリア人の引き続き、人々の持っていた壁と境界線を越えたところにいました。皮なめし、ということは、死体を取り扱っている職業です。律法では、死体に触れれば汚れるとされています(レビ 11:40)。汚れた職業と考えられていました。そこにかかなりの期間、滞在していました。ペテロが、自分も気づかぬうちに、キリストの平和の福音の使者として、壁を崩して架け橋になっていたのです。リダやヤッファは異邦人の多い町で、皮なめし職人シモンのところにいるということで、次第に、宗教的なユダヤ人とそうでない人々の垣根や壁を越えて神が動かしておられることを見ます。そして 10 章は、ついにローマ人の百人隊長、コルネリウスの一家に福音を伝えるという出来事が起こるのです。

こうやって主は、二人の使徒を異邦人宣教へ整えておられました。一人は、タルソというギリシア文化の強い町で生まれ育った、律法に熱心なサウロを異邦人宣教に召したこと。もう一人は、幻によって異邦人の住んでいるところに近づかせていることです。みなさんにも、次の福音の戸を開くように、神が招いておられるかもしれません。御霊の導きに心を任せてみましょう。